

令和6年度

飛騨市少年の主張大会

～ 発表記録集 ～



主催 飛騨市青少年育成市民会議

共催 飛騨市 飛騨市教育委員会

もくじ

【中学生部門】

却 「消滅可能性自治体」脱
古川 三年 天木 あまき 陸哉 りくや
： 1

何度でも立ち上がる
古川 三年 糸井 いと い すみれ 董
： 3

家族のかたち
古川 三年 大北 おおきた しふあ 紫羽
： 5

自分を好きでいること
古川 三年 北村 きたむら ここみ 心美
： 7

自分らしく生きること
神岡 三年 新家 あらいえ れいみ 伶美
： 9

【小学生部門】

人間も動物も平等に幸せに
神岡 六年 吉澤 よしざわ めら 芽蘭
： 11

「ありがとう」の大切さ
神岡 六年 仲表 なかおもて いのり 依乃里
： 13

楽しさ
宮川 六年 岡田 おかだ ひなと 陽斗
： 15

笑顔にするために
河合 六年 板屋 いたや しま 紫万
： 17

つながる思い
古川西 六年 石原 いしはら そうき 颯起
： 19

だれかのためにできること
古川 六年 松田 まつだ まき 真星
： 21

飛騨の自然を生かしてほしい
古川 六年 下出 しもで ゆき 幸希
： 23



令和6年度 飛騨市少年の主張大会 開催要綱

1. 趣 旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

当大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。
2. 主催・共催

飛騨市青少年育成市民会議 ・ 飛騨市 ・ 飛騨市教育委員会
3. 期日・会場

令和6年6月16日（日） 9:30 ～ 12:00 古川町公民館 大会議室
4. 部門・資格

中学生部門：市内中学校の生徒 小学生部門：市内小学校の児童
5. 発表内容

①社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など
 ②家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友だちとの関わりなど
 ③テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など
6. 発表要項

「5. 発表内容」①②③の中から1つを選び、5分以内で発表する。
7. 出場者の決定

各学校に作品を募集し、各校長より出場者の推薦を受け決定する。
8. 出場者

中学生部門：5名 小学生部門：7名
9. 表彰

優秀賞 （出場者全員）
10. 出場者の推薦

中学生部門については、選考委員会により審査し、2名を第46回少年の主張岐阜県大会～わたしの主張2024～飛騨地区選考会に推薦する。
11. 選考基準

下表のような論旨、論調、総合の3区分で採点する。

区 分	No.	審査のポイント
論 旨 (内 容)	①	鋭い感性で新鮮な主張であるか
	②	新しい情報や視点があるか
	③	個人の体験にとどまらず、一般性や社会性があるか
	④	提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
	⑤	論旨が一貫し、構成がしっかりしているか
	⑥	事前に提出された原稿と大幅な内容変更がないか
論 調 (話し方)	⑦	主張の内容が共感と感銘を与えているか
	⑧	説得力のある話し方であるか
	⑨	話しぶりに熱意と迫力があるか
総 合 (態 度)	⑩	落ち着いて話していたか
	⑪	聞く人に強い刺激や印象を与えていたか
	⑫	発表時間が5分程度に収まっているか
12. 日 程

9:30 ～ 9:45 開会式 9:45 ～ 10:20 発表（中学生部門）
 10:20 ～ 10:35 休憩 10:35 ～ 11:20 発表（小学生部門）
 11:20 ～ 12:00 表彰・審査発表・指導講評・閉会・記念写真撮影



「消滅可能性自治体」脱却

古川中学校 三年 天木 陸哉

春休み、母と車で東京に行った。浅草の浅草寺を通ると、道をはみ出すほどの観光客。渋谷のスクランブル交差点にも、僕の地元では考えられないほどの人がいて、思わず興奮した。日本全体で人口減少、少子高齢化と叫ばれる中、東京や大阪、名古屋にはたくさんの方がいるのを見ると、何だか他人事のように思ってしまう。そんな中、僕の住んでいる飛騨市が「消滅可能性自治体」という衝撃的なニュースが飛び込んできた。

「消滅可能性自治体」とは、二〇二〇年から二〇五〇年までの三十年間で、二〇代から三〇代の女性が半減し、「最終的には消滅する可能性がある」自治体のことだ。現在の飛騨市の人口、約二万二千人。二十年前、約三万人だった人口は年々減少している。飛騨市の未来を守るため、自治体任せではなく、住民が一丸となって考えていかなければならない。

僕にできることを考えたとき、マイプロ活動が浮かんだ。これは、古川中学校の生徒が自分の得意を生かし、地域に貢献する活動である。僕は、飛騨市の魅力を発信し、仲間とともに、市長や企業に僕たちの考えを伝える活動をしたと考えた。

若年女性人口を増やすためには、若者世代が住みやすい街であること、子育て支援の充実が必要である。既に飛騨市では、若年女性や子どもたちを選ばれる市となるよう、様々な対策が講じられている。その中で僕が発信した

いのが補助金制度だ。僕は将来、大学進学を考えている。最大三百六十万円まで借りられる奨学金は、母の負担を少しでも減らしたい僕にとってとても嬉しい。さらに卒業後、飛驒市内に住み、就職すれば、全額返金する必要がなくなる場合がある。また、飛驒市在住で結婚すると、一世帯あたり三十万円。夫婦ともに二十九歳以下だと、六十万円支給される制度もあるようだ。

充実した飛驒市の補助金制度は、どのくらい周知されているのだろう。せっかく制度が整っていても、伝わらなければ意味がない。進学を機に転出する若者が多いと言われる中、一人でも多くの人に「補助金制度が充実している地元で就職しよう。」「地元に住み続けよう。」つい地元に戻りたくなるようなイメージをもってもらうことが重要だと思う。そこで、飛驒市のホームページや広報以外にも、もっと住民一人ひとりにアピールしたいと考えた。ここで、僕にできることは、「飛驒市内の学校や企業に向き、飛驒市の充実した補助金制度の利用促進を伝えること」だ。

それだけではない。ジェンダーギャップの大きい地方を避け、都会に転出する若者が多いと言われる今、女性が働きやすい職場が増えることが重要だと思う。短時間勤務や在宅勤務などを取り入れた企業が増えれば、仕事と子育てを両立しやすくなるのではないか。そこで、僕は提案したい。「子育てしながら働く女性と雇用する企業に補助金を出す」というものはどうだろう。他にも、補助金利用促進のため、「一人ひとりの条件に合う補助金を、アプリやホームページで検索するシステム」の導入はできないだろうか。僕たちが飛驒市の未来を守る、そんな思いで様々な提案をしてみた。

さらに併せて発信したいのが、子育て世代や子どもに嬉しい施設だ。「すぎさき わくわく広場」。瀬戸川の鯉がモチーフのローラーライダーや、年代別にエリア分けされた遊具。屋根付き休憩所やきれいなトイレ。幅広い年齢の子どもたちが安心して遊べると人気で、いつも賑わっている。僕の親戚も、三十分以上かけて遊びに来る。「飛驒市図書館」も同様で、親子で読み聞かせを楽しめる「こどもフロア」や、集中して学習できる「情報発信室」。

飛驒の家具も取り揃えており、とても居心地が良い。僕も勉強に集中したいとき、一日中図書館で過ごすこともある。学校以外で、友人たちと勉強に励む場所があるのは嬉しい。飛驒市に住んでいると気付けないけれど、恵まれた環境である。だからこそ、中学生である僕の言葉で、発信していきたいのだ。

今年、「住みたい田舎ベストランキング」の上位に飛驒市が入れたのも、飛驒市長をはじめとする市役所職員の皆さんの努力と、それに賛同する方々のおかげである。それでもなお、「消滅可能性自治体」である今、僕にできることは、堂々と話せるという得意を生かし、若者代表として、飛驒市の良さ、住みやすさ、新たなアイデアを、声を大にして伝えることだ。飛驒市の未来のために、人口減少を必ず食い止め、消滅可能性自治体から脱却してみせる。



何度でも立ち上がる

古川中学校 三年 糸井 董

「私は学級長に立候補します。」

中学二年生、後期組織決め、私は学校生活を送る中で初めて、学級のリーダーである学級長に立候補しました。今までの自分はリーダー役に自分から進んで取り組むことはしてこなかったので、自分の中でこの立候補は大きな決断でした。「この学級で良かった」とみんなが思えるようなクラスを自分の長所である明るさで作り上げたかったです。けれど、女子の立候補者は二人であり、選ばれるのは一人のみ。組織決めの前から、立候補者がもう一人いることは知っていました。自信をもって人に話せるような実績のない私は、すごく悩みました。「落ちたらどうしよう。」と不安なことばかりがよぎったり、何度も諦めてしまおうかと考えたりもしました。でも今、諦めてしまう方が私は後悔する。悩みに悩んだ末、立候補という決断をしました。

しかし、投票の結果、私は選ばれませんでした。胸が苦しかったです。いろんなことがフラッシュバックして頭に浮かんできました。何が足りなかったのか、何が悪かったのか、自分を責めました。後期の係は学級長一択だったので、他の係をもつて頑張れる気がしなかった私ですが、最終的に体育係になりました。

家に帰ってから苦しかったです。乗り越えられる気がしなくて、気持ちが悪かったです。そんなとき、毎日手に取る日記を開きました。そ

ここには仲間からの沢山のメッセージが。「葦さんならどんな仕事もやり遂げてくれます。」「望まない係でも一生懸命にやってくれるはずです。」その言葉一つひとつが私を勇気づけ、前向きにしてくれました。ようやく、気持ちの整理ができました。「私ならどんな仕事もやり遂げられる。」「望まない係でも、誰よりも一生懸命に頑張ろう。」「半年後、後悔はないと言える自分になろう。」そんな心構えをもちました。

その後の体育の授業では、すごく頑張りました。やり切ると決めた以上、自分の最善を尽くしました。授業評価「五」を取るために、毎日朝一日の始まりに目標を知らせたり、悪かったところを直すために授業の流れを工夫したり、自分でもこんな全力が出せるのかと実感するほどでした。何と言っても、私はこの全力がとても楽しかったです。いつも納得いかなかったらそこで諦めてしまう私が、ここまで頑張りが続けたことで、自分に少し自信をもてるようになりました。

後期も終わりに近づき、一年を振り返るとき。二年生で一番頑張ったことを、私は「係の仕事」と言えるようになっていました。はじめは頑張ろうという気もなかったけれど、残念な結果でも、それをしっかり受け入れ、次を生かしてきました。たくさん自分を責めたりもしましたが、諦めそうになったりもしましたが、足を一歩前に出し、立ち上がって進むことができました。そんな自分に出会えたのは、あのとき落ちたから。あのとき学級長になっていたら、今の私には出会えなかったのかもしれない。

「立ち上がる」言葉にしてみれば、簡単だという人もいるかもしれませんが。

だけど、決して簡単なことではないのです。自分が望む結果にはならないかもしれないし、一つのことができるようになってからもまた一つ、目の前に大きな壁ができることだってある。逃げることもあるけれど、それでも自分を信じて諦めないことが大切なのです。「自分を信じて、立ち上がる」力が私の長所だと、自信をもって言えます。そう考えると、あの瞬間は、自分が強くなるためのピースだったと思います。

生きていく中でたくさんの方がいけない出来事に出会うでしょう。上る段階で頂上が見えなくて立ち止まることもあるでしょう。何をやるにしても途中で壁が現れることが付き物の人生で、きつとくじけそうになるときがきます。大切なのは、くじけそうになったとき、くじけてしまったときに立ち上がる力です。そのことを立候補とともに学びました。私にとって、なくてはならない時間だったと思います。

今、私は三年生になり、学級長になりました。ずっとやりたかった係だけど、やっぱり壁があります。きつとまた、たくさん壁が立ちはだかることでしょう。けど心配ない。私は何度でも、何度でも、

「立ち上がります。」



家族のかたち

古川中学校 三年 大北 紫羽

私には父がいません。

私が幼い頃、母が離婚したからです。幼い私には何が起こったか分からず、気がつけば父がいない日常が当たり前になっていました。もしお父さんがいたら…と考えることも何度かありました。他の家族を見て、うらやましく思うこともありました。それでも私は、父がいなくても十分幸せだと思っています。ですが、たまに「シングルマザー」ということに偏見をもつ人がいます。私はシングルマザーだということは、決して悪いことではないと思っています。今、この世の中には、シングルマザーやシングルファザーが増えてきています。一人で子育てをするということの大変さは、やってみないと分かりません。ただ、それぞれの家庭には、それぞれの家族のかたちがあると思います。私は母の事をすごく尊敬しているし、家族が大好きです。お父さんもお母さんもいて楽しい家庭もあれば、お父さんがいなくても幸せな家庭だってある。どう思いかは人それぞれですが、今自分を支えてくれる家族を大切にしてほしいです。

そんな私の母は病気がちです。父はいないし、母は病気がち。お金のことなど心配なことがたくさんあります。でも家族みんなで助け合いながら、必死に生きています。そのおかげで家族の仲がより一層深まりました。

私と母は当然「親子」なのですが、「親友」のような関係でもあります。私

が一方的にそう思っているだけかもしれませんが、母と二人で過ごしているときは、どうしても友だちと一緒にいるような感覚になるのです。母と二人でドライブをしたり、買い物に行ったりする時間が好きです。辛いことがあったときには親身に寄り添い、アドバイスをくれる。嬉しいことがあったときは、一緒に喜んでくれる。あれをやれ、これをやれ、というのではなく、私の意思を尊重し、否定することなく見守ってくれる。たったこれだけのこともかもしれませんが、そんな母を私は心から尊敬しているのです。

家族というものは、何にも代え難いほど大切に愛しいものです。そんな家族のもとに産んでくれた母に、ものすごく感謝しています。たまに母や祖母に父のことを聞きます。名前や顔もあまり覚えていないけど、私の名前を母と一緒に考えてくれた父のことも好きだし、感謝しています。もし父がいたら、私はどんな子に育っていただろう、と考えることも楽しかったですが、やっぱり私は母に育ててもらえたことが一番嬉しいです。

シングルマザーということは、想像を絶するほどの苦労、困難があったと思います。そのうえ、私の母は三人の子どもを産みました。兄はもう成人していますが、私と弟はまだ中学生です。まだまだ母の手を借り、母を困らせてしまいますが、少しでも母の手助けができるように、母が苦しまなくて済むように、今自分にできることを見つけ、母を助けていきます。

私と同じようにお父さんがいない人、お母さんがいない人、両親ともいない人、いない人、すべての家庭にそれぞれの家族のかたちがあり、それはその家族にしか作れないものです。

私は三人の子どもを産み、育て、一生懸命働いてくれた母を尊敬し、誇りに思うのと同時に、ものすごく感謝しています。お父さんがいないからかわいそうだ、なんて思いません。お母さんがいて、みんながいて、幸せだと思っています。

これからも、何があろうと家族の大切さを忘れず、感謝しながらみんなで力を合わせて頑張っていきます。そして、いつか母のようになつこいい女性になりたいです。子どもと真剣に向き合えるお母さんになりたいです。

それぞれの家庭には、それぞれの家族のかたちがあると私は思っています。



自分を好きでいること

古川中学校 三年 北村 心美

あなたは自分が好きですか。この質問に「はい」と自信をもって答えられる人は少ないのではないだろうか。自分じやないキャラを演じながら学校生活を過ごす人、やりたいことが見つからずグループに群れている人。私もそうでした。嫌われたくないから、自分の居場所がなくなるのは怖いから、そう思っていたのは、自分に自信がなかったからです。自分という存在の価値を友だちとの繋がりに見出そうとしていた私。「こうしたらみんなになんて言われるかな。」「もしああなったらどうしよう。」「頭をフル回転させては気疲れし、開放感を求め家に帰る日々。そんな私だからこそ、伝えたいことがあります。

今の私は、自分が好きです。何事も自分の意志で判断できるところ、おっちよこちよいで、数学が苦手なところ。様々な長所短所があるけれど、自信をもつて言うことができます。こう思うことができたのは、中二の秋、当時担任だった先生から言っていたいた、ある一言のおかげです。「学級長、やってみない？」声をかけられた私は、「もしこんな大きな仕事を経験したことのない私になったら、みんなにどう思われるのだろう。」という不安と、「今までの自分を変えるチャンスかもしれない。」という気持ちで心が大きく揺れ動きました。でも、何か意味をもって声をかけてくれたのだと思い、勇気をもって挑戦することができました。

この経験から、学校での私の行動は、少しずつ変化するようになりました。それは、積極的に動けるようになったことです。自分のやりたい仕事に手を挙げ、行事や係で前よりも力を入れるようになったこと。新学期、あまり話したことがない人にも「おはよう。これからよろしくね。」って言えるようになったこと。ほんの小さな行動かもしれないけど、自分にとっては大きな成長です。この一つひとつが今の自信に繋がっています。人は案外、ささいな一言で自分を変えることができる生き物です。最初は自分に自信がなくても、勇気を出した行動で、変わることに、成長することの可能性は無量大だと思います。今の私から、挑戦することを恐れていた過去の私へ、メッセージとして届けたいです。

私が自分を好きになれたのは、もう一つ理由があります。それは、群れることなく自分との時間を楽しめるほど、自信をもてたことです。私には仲の良い友だちがいます。だからといって、休み時間ずっと一緒にいるわけではありません。本を読むなど、好きなことをして自分との時間を楽しんでいます。『群れ』には意見を共有し、仲間がいるという安心感をもてるメリットと、個性や自分の想いを潰してしまうデメリットがあります。自分の言動で輪を乱すかな、という心配が必要だし、ひどい場合、いじめにも繋がりがありません。だからといって一人でいることを強要しているわけではありません。本当に必要なのは、自分の好きなこと、したいことの「自分らしさ」に「向き合う」ことだということを私は多くの人に伝えたいです。

母は私がお腹の中にいるとき、流産になりかけました。もしかすると私は

この場にいなかったかもしれません。命をかけて産まれてきた私は、この人生を他人の言葉や自分に対しての思い込みで無駄にはしたくありません。私のしたいことに一生懸命向き合ってくれたこと。父や母が忙しいときでも送り迎えをしてくれたこと。手帳に私からの手紙を挟んでくれていること。家族からの愛情と支えがあって私は元気に過ごすことができます。だから私は、母が一生懸命守ってくれたこの命を、最後まで守り抜きます。様々な経験を通して、まだ見ぬ自分の新たな一面を知り、私らしい人生を歩みます。でもそれは誰にとっても同じです。かつての私のように、自分らしさを出せていない人、周りを気にしていつも笑っている人に、こう伝えたいです。自由になってもいい。型からはみ出してもいいんだよ、と。自分の良いところを認めて、ありのままの自分で笑ってほしいです。こんなこと、私が言える立場じゃないかもしれないけれど、私の一言で誰かの人生がさらに豊かになりますように。

もう一度問います。あなたは自分が好きですか。



自分らしく生きること

神岡中学校 三年 新家 伶美

私は、アンケートやテストが嫌いだ。と言っても、それらに答えることが嫌いなわけではない。アンケートやテストに必ずある、性別欄に対して、私は嫌悪感を抱いている。理由は二つ。一つ目。アンケートやテストの結果に、男女の差を出す必要性が理解できないから。生徒を性別で分類して、何か意味があるのだろうか。二つ目。私は、自分の性別がどちらなのか結論が出せない。戸籍上では「女」となっているらしいが、私はその分類に納得できていない。

自身の性別に疑問をもち始めたのは、中学一年の秋ごろだったと思う。体育祭の練習期間に入り、熱中症対策として、長袖のジャージを脱ぐよう指示が出た。私は、半袖短パンになることに抵抗を感じた。「身体を見られたくない。」そんな気持ちがあつたからだ。どうしてもジャージを脱ぎたくなくて、練習の時間は保健室で過ごしたり、何らかの理由を付けて、ジャージを着て参加したりしていた。それから、女性として見られることが、次第に嫌になっていった。理由は、自分でもいまだに分からない。分からないけれど、あの頃は、本当に、生きることすら辛くて、苦しかった。

一年生の二月。今まで長かった髪を、短く切ることに決めた。女性らしい髪型の自分と決別できる、そう思うと心が弾んだ。しかし、髪を切る

前日の父の一言が、私の心に刺さった。「やめた方がいいんじゃないか？」今から考えてみると、父に悪気はなかったと思う。でも私には、その言葉の裏側に、「女の子らしく生きなさい。」という意味があるように感じられ、とてもショックだった。このことは、自身の性別は男女という括りに含まれないことに気付くきっかけとなったと思う。

気持ちも不安定なので、当然、学校生活も不安定になった。登校もしたくなかったし、何に対しても頑張れなくなってしまった。二年生への進級を機に、心機一転して頑張ろうと思い、提出物を確実に出したたり、授業に集中して向かったりと努力した。でも、努力したところで私の抱えている心のもやが晴れるわけではない。結局、この努力が続いたのは一ヶ月ほどで、また、無気力な私に戻ってしまった。大好きな吹奏楽にも力が入らなくなってしまふほど、辛い時期だった。自分自身のこと、だんだん嫌いになっていった。

無気力で、学習にも部活動にも向かえなくなってしまった私に対して、両親から話があった。怒られる、と思つたが、両親は私のことをとても心配してくれた。母は私に言った。「自分を大切にしてほしい。自分を責めないで。伶美はよく頑張っている。自分を、好きになって。」この言葉が、私の心に響いた。私のことをいちばんに考え、大切にしてくれる母の温かさに、私は救われた。

それから私は、「自分は、このままでいいんだ。」と思えるようになった。

「女性」でもなく、「男性」でもなく、「新家伶美」という自分なんだ、と思えるようになった。

こう思えるようになった私は、生きることに向きになれた。日常生活を楽しいと感じ、心から笑えるようになった。信じられる人もできた。以前は、自分の性別についての悩みを打ち明けることに抵抗があったが、今、こうして自分をありのまま語ることができる。

私は、世の中の二つの性別のどちらにも当てはまらないと思つている。少なくとも、自分を「女性」と認識していない。気持ち悪い、と思う人もいるだろうが、これが私だ。

私と同じように、性別で悩んでいる人へ。

人を、分類なんてしないでいいよ。あなたは、たった一人のあなたなんだよ。そして、世界の人たちへ。私たちのようにアンケートやテストのちょっとした性別欄だけで、悩んでいる人もいます。難しいかもしれないけれど、理解してくれると嬉しいです。

私は、自分を認め、誇りをもつて生きていく。私のこういう生き方が、誰かの助けになったり、性別に関する理解につながったりしたら幸せだ。



人間も動物も平等に幸せに

神岡小学校 六年 吉澤 芽蘭

みなさんは、動物の殺処分があることを知っていますか。また、動物を捨てる人がいることを知っていますか。

私は少し前に、インターネットで初めて殺処分ということがあるのを知りました。殺処分について調べてみると、「動物を炭酸ガスで殺して処分する」と書いてありました。窒息死という事です。殺処分を知っている人でも、殺処分されるのは犬や猫のイメージが大きいと思いますが、殺処分されているのは、犬や猫だけではありません。モルモットやニワトリ、亀なども一日に三〇～五〇匹も殺処分されています。この数字を少なく感じる人もいるかもしれませんが、一日に多くの命がなくなっており、どんな動物であっても殺されていることは事実です。さらに、「その場所には動物がもがいた跡も残っている」ことも知りました。

私は動物も人間と同じように幸せになってほしいです。殺処分が無くなるように活動している人がいますが、殺処分が完全になくなったというわけではありません。

殺処分だけではありません。動物を飼っていたのに気に入らず、捨てる人もいるそうです。まともに食事や睡眠も与えられず、たくさんの命がなくなることもあるそうです。病気にかかって苦しんでいる子もいるかもしれません。腐って亡くなる子もいます。飢えて亡くなる子もいます。生まれてすぐ

に苦しい思いをさせられる子もいます。人間ではそんなことはないのに、この不平等、私はおかしいと思います。動物は常に死と隣合わせです。

私も今、犬を飼っています。その子は、「売れ残っていた子だった」と母から聞きました。その子も売れ残ったままだったら、どうなっていたか分かりません。そう考えると心が痛くなります。

他の国では、殺処分がゼロの国もあるそうです。殺処分をなくし、捨てる人もいなくなつて、どこの国の動物も、幸せに暮らしてほしいです。

私はそんな動物たちを「助けてあげたい」ずっとそう思っています。だから私は将来、みんなが平等に幸せに過ごせるために、動物の保護などをしていきたいです。そのために、みんなに命の大切さを知ってもらい、動物も人間も平等に、幸せに過ごしてほしいです。

今ペットを飼っている人は、必ずいつか、お別れしないといけない時がきます。私が今飼っている子もそうです。おばあちゃんの家で飼っていた子も、昔、亡くなりました。私はその時、涙が溢れ続けていました。「もう会えない。」そう考えると、今でも涙が溢れてきそうです。どんな動物を飼っても、必ず最後の時が来ます。人間だつてそうです。ペットを飼うと決めたなら最後まで責任をもつてお世話してあげてほしいです。ペットを飼った時、お店の人もペット本人も、大切にお世話してくれる人だと思っているはずです。

愛情をたくさんもつて育ててあげたら「捨てる」事にはつながらないと思います。愛情をもつて育てていないから、優しい子に育たない。優しい子に育たないと捨ててしまうかもしれない。ペットは、捨てられると生きてい

けない。もしくは保健所に行つて殺処分されてしまう。

だから、私はまずは愛情を持つて育てる事が大切だと考えます。ペットも大切な家族の一員です。自分の大切な家族をしっかり守ってほしい。「人間も動物も命は大切だ」ということを知つて、愛情をもつて育ててほしいと思います。私は、世界中の人間や動物に幸せで楽しい人生を送つてほしいです。人間も動物も平等に、幸せに過ごせるようにしていきたいませんか。みなさんはこの事についてどう思いますか。どう考えますか。



「ありがとう」の大切さ

神岡小学校 六年 仲表 依乃里

皆さんは、「ありがとう」を言葉にして伝えていますか。私は、些細なことでも、なにかしてもらった時には、「ありがとう」を伝えていきます。皆さんにも、感謝の気持ちをこめて「ありがとう」と伝えてほしいです。

「ありがとう」を伝える効果について調べてみると、幸せホルモンが出て、ストレスが減ったり、幸福度が高まったりすることが分かりました。また、伝えられた方も嬉しくなり、伝えた方も、伝えられた方も、両方とも幸せにする力があります。

今年の春、私は大事な家族、おじいちゃんを突然失いました。ある日、おじいちゃんに病気があったことが分かり、入院することになりました。しかし、その病院では手術ができないので、転院することが決まりました。その時はいつもみたいに元気な様子でしたが、次の日の朝、体調が悪くなり、大切なおじいちゃんを失ってしまいました。私はいつも通り学校に行っていました。家に帰っておじいちゃんのことを聞き、頭の中が真っ白になって、一気に涙が溢れ出てきました。保育園のときには、一緒に滑り台に登って遊んでくれた、そんな優しいおじいちゃんがいなくなってしまうなんて、想像ができませんでした。そんなとき、おばあちゃんは言っていました。「命は、儚いものだね」と。私は、儚いという意味は分かりませんでした。でも、大切な人と一緒にいる時間は、長いようで短いのだなと思いました。

たくさんの涙が溢れ出たのは、「悲しい」という思いだけではなく、おじいちゃんにもっと気持ちをこめて「ありがとう」を伝えておけばよかったと後悔したからでもあります。

いつでも会えると思っていた人でも、いつ会えなくなるかは分かりません。皆さんも当たり前の日常が当たり前でなくなったということを経験したことがあるのではないのでしょうか。

「明日から学校はお休みです。」小学一年生の終わりから突然流行した新型コロナウイルス。毎日通っていた学校が休みになり、家で過ごす時間が増えました。それまで学校は、勉強をしないといけないから、行きたくないなと感じることもありました。でも、学校に行けなくなってしまうと、毎日会って遊んでいた友達に会えない事がつまらない、寂しいと強く感じました。今では普通に学校に通い、友達に会えることができます。そんな当たり前の日常がとても嬉しいことに気付きました。

今、一緒にいる人と過ごす時間は当たり前のようで当たり前ではない、とても大切な時間だからこそ、些細なことでも『ありがとう』を伝え、たくさんの人を幸せにしたいです。

お母さん、いつも私たち家族のために、おいしいご飯を作ってくれてありがとう。おかげで毎日元気に過ごすことができます。お父さん、勉強で分からないところを教えてくれたおかげで分かるようになりました。ありがとう。クラスの皆、運動会のための草取りに、協力して真剣にやってくれてありがとう。

皆さんも誰もが幸せになれるように、どんなに小さなことでもいい。自分のできる範囲だけでもいい。できることを考えてやってみてください。自分にできる小さな行いの積み重ねが、誰かを幸せにする大きな手助けとなります。そして、自分の家族や友達と過ごす時間を大切にして今しか言えない、思いのこもった「ありがとう」をたくさん伝えてください。私はこれからも「ありがとう。」の気持ちを大切にして、些細なことでも声に出して相手に伝えていきたいです。



楽しさ

宮川小学校 六年 岡田 陽斗

ぼくは、今年から宮川小学校に転校してきました。六年生は、ぼくだけしかいないと聞いて、最初は不安ばかりでした。だけど、いざ入ってみると、人数が少なくても、宮川小では楽しいことがいっぱいでした。

宮川小は、全校八人です。一年生が一人、二年生が三人、三年生が二人、四年生はいなくて、五年生が一人、そしてぼくです。

宮川小に来て思ったことは、一人一人が大事にされているということです。人数が多いと、いろいろな意見や考えがあつて、時間内にみんなの考えを聞くことはできません。でも宮川小は、みんなの意見やアイデアを十分に聞くことができます。それらを大切にして休み時間を過ごしたり、学習したりすることが出来ます。

また、優しい言葉や温かい言葉にあふれています。ぼくが失敗して落ち込んでいるときに、同じクラスの五年生の仲間が「失敗しても大丈夫なんだよ。」と声をかけてくれたことがありました。相手は五年生だけどぼくはとても勇気づけられました。同じ年じゃなくても、まだ知り合ってからそんなに時間がたっていないなくても、ぼくたちは、とても良い関係です。

全校で遊ぶ時も楽しいです。ほかの学年の子と遊びながら関わることが楽しいです。今までは同級生と遊ぶことが多く、ほかの子がやりたいことだけで終わってしまうことがよくありました。でも、いろんな学年の子がいる

と、低学年の子も一緒にできることを考えないといけないから、どんなことがしたいかを聞いて、遊ぶことができるようになりました。

勉強も楽しいことが増えました。前までは勉強に対しては気が進まないことが多かったですが、今は毎日が楽しいです。それは分からないことがあっても、仲間や先生にすぐに聞くことができ、分かりやすいからです。そして、自分に合った学び方や進め方ができるのでよく分かります。授業では、自分が考えたことを五年生の仲間、職員室にいる先生や学校に来たお客さんに話して、聞いてもらっています。前までは、相手に伝えることが苦手でしたが、今は、はじめて会うお客さんにも、自分の考えを伝えることができ、すごく自信がつかってきました。自分が成長していると感じます。

また、宮川町のこともみんなで学んでいます。この間、全校のみんなで池ヶ原湿原に行きました。そこでミズバショウやリュウキンカなどの美しい花や自然のことを保護センターの岩佐先生に教えてもらいました。ぼくがまだ知らない宮川のことを学べて楽しかったです。ぼくはこのふろさと学習で宮川小のみんなとやりたいことができました。それは、池ヶ原湿原の美しさを、たくさんの人に知ってもらうことです。池ヶ原湿原に来る観光客が減っていると聞いたので、みんなでポスターなどを工夫して作り、よさを伝えたいと思いました。

このように、ぼくにとって宮川小での生活は楽しいことがいっぱいです。なんでこんなに楽しいのかな。と考えたときに、この楽しさはうれしさからきているんだなと思いました。ぼくが考えるうれしさとは、「自分がやりた

いことができること」「知りたいことや新しいことが分かること」「自分自身で自分ができたことが分かること」だと思います。そしてこのうれしさに、仲間や地域の人など、ほかの人が関わってくると、うれしさが楽しさになるのだと思います。「仲間と一緒にできるようになること」「仲間に話すことで自分のことを見直せること」「仲間から新しいことが知れること」こういう関わりがあることで、自分のうれしさが仲間との楽しさにつながっていくのだと思います。

「楽しさは仲間と一緒にある」のです。

悪口を言ったり、無視をしたりすることは気分が悪くてうれしくありません。優しい言葉で仲間と関わることができるから、気分がよくてうれしい、楽しくなります。

ぼくは、これからも、うれしさと楽しさがいっぱいある生活を、宮川小学校八人と「ともに」送っていききたいです。



笑顔にするために

河合小学校 六年 板屋 紫万

「知らざあ言つて聞かせやしよう 浜の真砂と五右衛門が 歌に残せし盗人の 種は尽きねえ七里ヶ浜その白波夜働き 以前を言やあ 江ノ島で年季勤めの稚児が淵 江戸の百味講の蒔賤をあてに小皿の一文字 百が二百と賽銭の くすね銭せえ だんだんに 悪事は上る 上の宮 岩本院で講中の 枕探しも度重なり 御手長講と札付きに とうとう島を追い出され それから若衆の美人局 ここやかしこの寺々で 小耳に聞いた音羽屋の 似た声色で小ゆすりばかり 名せえゆかりの 弁天小僧菊之助たあ俺のことだ」

私は、歌舞伎が大好きです。

これは、昨年の河合っ子座公演の歌舞伎の演目「浜松屋店先の場」の一場面です。私の役は主人公「弁天小僧菊之助」です。私の父も地歌舞伎をやっていて、昔この主人公、弁天小僧菊之助を演じていました。だからわたしも、父と同じ弁天小僧菊之助を演じてみたいと思い立候補しました。

しかし、台本を開いたら、自分のセリフがものすごくありました。お父さんもこんなに多くて長いセリフを頑張つて覚えたのだと思うと、「自分も頑張ろう」と思えました。長いセリフを覚えるのは本当に難しいのです。だから、例えば、「浜の真砂と五右衛門が歌に残せし盗人の」ところは、「浜の」「真砂と」「五右衛門が」というように言葉の句切りで切つて覚えるように

しました。一生懸命、全部覚えても、お父さんは「よく覚えたな」くらいの言葉しかくれません。お父さんも歌舞伎に対する思いが深く、とてもこだわりのあるので、セリフを聞いてもらうときも、つまづいたら「はい、最初から」とすぐ言います。「間違えたら終わり」という気持ちで楽しんでセリフ練習をしました。

覚えた後、家で聞いてもらうときも、お父さんはこだわるので、すぐ「はい、アウト」と言います。言葉のリズムや強弱がまだたのことでした。

元弁天小僧菊之助のお父さんが言うのだから「頑張らなあかん。」と思います。それにお父さんは、歌舞伎の演技やセリフを褒めることがほとんどありません。でも、うまくいくと「ふーん」と言いながらうなづきます。言葉では褒めないけどうなづくと褒められたようで嬉しくなります。お父さんが歌舞伎をやっていないければ、私は今、歌舞伎を「楽しい」と思っていないかもしれません。そんな今の私があるのは、お父さんのおかげです。身近に歌舞伎を覚えてくれるお父さんがいて幸せです。

学校で歌舞伎を覚えてくれるのは歌舞伎保存会の皆さんです。大下さんや下出さん、畑さんなどが、歌舞伎の言葉の言い回しや演じ方を実際に演じながら教えてくださいます。教え方も分かりやすくてたくさんのお客様ももらえます。それに、たくさん褒めてくださるので、頑張るぞという気持ちになります。優しい言葉で教えてくださるので、安心できるし、覚えやすかったです。歌舞伎が成功したのは、みなさんのおかげです。感謝しかありません。

去年の河合っ子座公演で、昔からの歌舞伎の言い回しの中に、現代のことも少し入れて演じたら、会場の皆さんがすごく笑ってくれました。自分の演技で、笑顔になったことや楽しんでもらえたことがとても嬉しかったです。だから、私が恩返しできることは、自分の歌舞伎でお父さんや地域の方を笑顔にすることではないかと考えました。「みんなを笑顔にするために」、今年の歌舞伎も楽しく成功させたいと思います。そして、それで河合町を明るくしたいです。

将来は、歌舞伎を教える人にはなりません。自分は歌舞伎の役者になりたいです。



つながる思い

古川西小学校 六年 石原 颯起

「ごろべさ」の颯起君。近所のおじいちゃんやおばあちゃんは、ぼくのことをこう呼びます。「ごろべさ」とは、ぼくの家の屋号です。屋号とは、その家の昔からのあだ名のようなものです。ぼくの先祖の名前が「五郎兵衛」だったことから「ごろべさ」になったそうです。正確なことはわかりませんが、五郎兵衛という人は、三百年以上前に生きていた人だそうです。ぼくの家には、お寺に預けている家系図があり、ずいぶん前から石原家があったことが分かります。ぼくの知らない五郎兵衛さん。そんな昔の人の名前でぼくの家は呼ばれ続けているのは、何だか不思議な感じがします。

僕の家は、六十年以上前にぼくのひいおじいちゃんが建てたそうです。その家をおじいちゃんが大幅なリフォームをしてくれました。おじいちゃんは、家が建った当時の日本建築を、ずっと大事にしたいと思い、古くなったところを直し、住み続けることができるように再現したそうです。おじいちゃんは、僕が三年生の時に亡くなってしまいましたが、おじいちゃんが直してくれた家は、今もじょうぶで僕たちが安心して住めるようになっています。つい先日、お父さんも少しリフォームをしました。ひいおじいちゃんも、おじいちゃんも、そしてお父さんも代々続いている家を守りたいという気持ちで、家を直しているのだと思います。

ぼくが住む太江には、千年以上前からある高田神社という神社があります。

神社の中にある石碑には、ひいおじいちゃんやおじいちゃんの名前が残されています。他にも知らない人の名前もたくさんあります。歴史ある神社を大事にしてきた人達の足跡だと聞きました。ぼくのおじいちゃんも、みんなが快適に利用できるように、トイレや神社周辺の道をきれいにしたり、直したりしたそうです。石碑に刻まれているたくさんの人達は、きつと長く続く神社を「大事にしていきたい。将来に残したい。」という思いで様々な取り組みをしてくれたのだと思います。

その高田神社では、毎年四月にお祭りが行われます。闘鶏楽もあり、ぼくも四年生から参加しています。練習は、まだ寒い時期から始まり、毎週行われます。一時間という長い間、ほとんど 休憩なしに重たい鐘を持ち続けるのはとても辛く、大変です。途中でめんどうだなと思うことが何度もありました。そう思っていた時、お父さんも子どもの頃に闘鶏楽をやっていたと聞きました。そして、今、大人になってからも、獅子舞で祭りに参加したり、地域の子どもたちに闘鶏楽を教えたりしています。どうして、祭りに参加し続けるのか、お父さんに聞いてみました。お父さんは、「ずっと昔から続いていた伝統を守りたい。ここで途切れることがないようにしたい。」と答えました。

めんどうだなと思っていた闘鶏楽も、始めてから三年目になりました。今では、「大事にしていきたいな。」という思いが変わってきました。ここまで続けてくるのに、関わってきた多くの人の思いをぼくが止めるわけにはいかないと思ったからです。そして、昔からある大切なものを、長く続けていく

ために、大勢の人の思いが重なっているということを感じるようになったからです。

お寺や公園、学校、家、そして名前。それぞれに歴史があり、色々な人の思いが重なって、つながり続けていることで今も残っています。その思いを知ること。そして、それをつなげていくことが大事だと思いました。ぼくができることは、ここまで大事に残し続けたもの、人、思いを大切にし、確実につなげていくことだと思います。



だれかのためにできること

古川小学校 六年 松田 真星

みなさんは、だれかのために行動することはできますか。ゴミを落とさない、ゴミを拾う、ぼきんをするなど、だれかのためにできることは身近にたくさんあります。

私は、よく地域の人と公園のそうじなどを行っています。始めたきっかけは、公園のそうじをしていた地域のおじさんを見かけ、声をかけてみたことです。いつも一人でそうじをしており、「大変そう。」と思い、勇気をもって「手伝いますよ。」と声をかけ、そうじを手伝い始めました。手伝いながらも私は、「なんですつとこの人はそうじをしているのだろう。」と疑問に思っていました。その答えを知るために、何度も考えました。「見た目をよくするため。」それとも「なんとなく。」と。でもやっぱり本人に聞こうと思い、次の日「おじさんはどうしてこの公園のそうじをするんですか。」とたずねてみました。するとおじさんは、「子どもたちが元気に遊ぶ姿が見たいからかな。」と話してくれました。それがおじさんがそうじをする答えでした。でも私は、「そうじと子どもは関係があるのだろうか。」という新たな疑問が生まれました。もう一度おじさんに聞こうと思いましたが、この答えは自分で探さないとだめな気がしました。それからその疑問の答えを探しながら、そうじの手伝いを続けました。時には、めんどくさかったり、やらなくてもいいんじゃないかと思ったりする日もありました。でもそうじと子どもの関

係について知るため、そうじをやり続けました。そんなある日、「この公園であそびたい。」という声が聞こえてきました。小学校低学年くらいの子で、自分たちがそうじをしている公園に入っていました。その子たちはすべり台にブランコ、鉄ぼうをしたり走り回ったりと楽しそうに遊んでいました。私はその様子をみて気づきました。あの子たちはケガもなく安心・安全に楽しく遊んでいる。それはおじさんが毎日この公園をそうじしてくれているおかげだ。このことがそうじと子どもの関係だと思いました。そうじをすれば、公園の見た目が良くなり、この公園で遊びたい、この公園は楽しそう、そう思ってもらえる。また、そうじをしてゴミなどをなくすと、走って遊ぶときに邪魔になったり、ゴミにつまずいて転んだりすることがなくなる。おじさんが教えてくれた「元気に遊ぶ子どもの姿」とはこのことだと考えました。もしこの答えがおじさんの思っていることとちがっても、自分に納得のいく自分だからこの答えでいいんじゃないかと思いました。そうじと子どもの関係がわかってからは、普段しているそうじとは少しちがいで、うれしいという気持ちがありました。この気持ちの理由はすぐにわかりました。そうじをすることでケガをなくして、安全に楽しく遊ぶだけかのためになっているからです。自分が何気なくしていたそうじがまさかだけかのためになっているとは。でもこれに気づいたからこそ、もっと工夫してだけかのために動きたいと改めて感じました。

それから公園以外でも、自分のできる限り人の役に立ちたいという思いが生まれ、私の学校生活も変わりました。例えば、学校にゴミが落ちているの

を見つけたら捨てようになっています。そうじに関わることで以外では、学習委員として、古川小学校のみんなが楽しく真剣に学習に取り組めるよう、様々なアイデアを考えて、提案するようになりました。また、委員長が話し合いの進行に困っている時には、「こうするといいいんじゃない。」と自分から声をかけてフォローしています。自分のしていることが誰かのためになっていると考えると、不思議と勇気がわいて、いろいろなことに自分から取り組めるようになりました。

みなさんはだけかのために動いていますか。動いていないと思う人もいでしょう。ですが、学校の行事や家族の手伝い、そんな身近なことでもだけかのためになっています。みなさんも自分の行動の意味を見つけ、自分や仲間のために続けていってみてはどうでしょうか。



飛驒の自然を生かしてほしい

古川小学校 六年 下出 幸希

結論から言うと、ぼくは、この古川に、木工クラブを作る。そこで、木を生かして遊具を作ることや体験活動のイベントをしたい。そして、子どもから大人、お年寄りの遊びや交流の場になるよう、椅子なども作りたい。なぜなら、飛驒には、自然豊かな木や環境があるからだ。だからこれを生かし、遊ぶ場所や木について興味をもてるような体験やクラブを作るとは、間違いなく地域の発展につながると思う。

古川には公園はあるけど、ぼくは、気軽に安全に遊べる数が少ないと思う。例えば、ぼくの身近な所には、増島児童公園がある。だが、遊具が少なかったり、さびていて危なかったりする。他にも、虫やクモの巣がはっていることや、公園が暗くなっている遊びにくい物もある。これは他の公園でも同じようなことがいえる。やはり、みんなが気軽に安全に遊べる公園は少ない。埼玉に、ぼくは住んでいた時がある。その時は、近くに公園がたくさんあって、その中でも広い公園もあった。そこでぼくは、友達とたくさん遊んでいた。もし、そのような公園が古川にもあったら、外で十分に遊ぶことができる。だから、安全で楽しく遊べる公園はあった方がいいと思う。

最近、新しくなった杉崎公園もあるが、ぼくの家からだと、自転車で行くのは遠いし、そもそも子どもだけで行ってもいいのかも分からない。家族に連れて行ってもらうのも手間だし、時間もかかり大変になってしまう。だから、

古川小学校の校区にも、木を使ったみんなが遊べる公園を作りたい。

どんな遊具がほしいかも考えてみた。木を使ったシーソーやジャングルジム、鉄棒、ブランコなどを作りたい。他にも、今の円光寺や杉崎公園にある、椅子や屋根のある休けい所もほしい。鉄なども使うことで、安全で身近に木を感じることが出来る。飛驒の技術の高さならきつとできると信じているし、ぼくは作ってみたい。

古川小学校の木工クラブでは、飛驒の木について学んだり、本だなのような作品を作ったりしている。ぼくは、これが飛驒のよさを生かしているんだなと思った。そして、のこぎりや糸のこを使って工作をするから、みんなのいい経験にもなるし、楽しむことができる。こういったことが、公園の遊具に使われたり、木を使ったイベントができたりすれば、もっとみんなで飛驒のよさを知り、楽しめると思う。

しかし、ぼくだけでは公園の遊具はもちろん、木工クラブも作れない。だから、飛驒市や地域の方に協力をしてほしい。そのために、ぼくはどうしたらよいか考えた。

例えば、古川小学校のような木工クラブを他の学校でもやってみるのはどうだろう。古川小学校に講師できている方を他の学校にも呼んでもらい教えてもらう。そして、飛驒の木のよさに興味がもてるよう、授業の中できっかけを作る。そうすれば、たくさんの人が「木工クラブに入りたい」と考え、人が集まると思う。次に、木工クラブで公園に設置できるような遊具をつくる。みんなで作れば、遊具だけでなく公園に親しみがもてる。きつと遊んだ

り交流したりする場所になる。他にも、飛驒には木をあつかう会社がたくさんある。その会社にお問い合わせをして、木をいただいたり、一緒になって作ったりしたい。ぼくは古川中学校で、椅子を作ったと聞き、すごいなと思ったし、自分も作りたいと思った。

ぼくだけでは難しいけど、飛驒の自然を生かせる、木工クラブを作り、公園の遊具などを作りたい。そのために、地域の人にぼくの思いや考えを伝えます。

令和6年度
飛騨市少年の主張大会
～ 発表記録集 ～

作成：飛騨市青少年育成市民会議
